美馬市・美馬郡

吉野川お散歩紀行

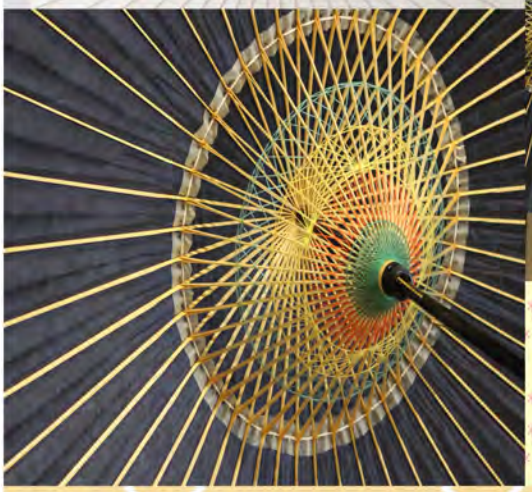
伝統産業『美馬和傘』を未来へつなぐ美馬和傘製作集団、『竹』を活用したまちづくりに取り組むNPO法人美馬体験交流の会に出会う。

吉野川中流域には、多くの水防竹林が残されている。竹は、地下茎がからみ合って、茂っているために地盤を強くし、河岸を水の侵食から守る働きがあった。この水防竹林は、かつては和傘などの材料となり地場産業の発展をもたらした。

今、その和傘を復活させようとしている美馬和傘製作集団、竹林を保全し、美馬市、そして吉野川の魅力を発信しているNPO法人美馬体験交流の会に話を聞いた。

徳島県立つるぎ高等学校と美馬和傘製作集団の皆さん。

伝統の和傘を復活
美馬和傘製作集団　代表
住友　聡（すみとも　さとし）さん



和傘の仕事は分業制で、住友さんは現在、材料の調達や製造を担当している。和傘の繊細さ、精巧さに魅せられ、和傘を語る時、本当に優しい表情になる。

ろくろ。材料となるエゴの木も山へ取りに行く。和傘の中枢ともいうべき部品。和傘の骨をここに入れて糸で留める。繊細な細かい細工が施されている。→

「和傘ってね。使う人が楽しむものなんですよ。中を見てください。きれいでしょう」住友さんにそう言われて中をのぞくと、今まで見たこともない世界が広がっていた。和紙から透ける光、何色もの糸飾り。折りたたんだ時もすっきりとした柔らかいシルエット。和傘とは、こんなに美しいものだったと初めて実感した。

旧美馬町の東部郡里（こおざと）地区は、古くから和傘製造がさかんに行われていた。かつては、年間100万本の傘を生産し、岐阜に次ぐ全国第2位の生産量を誇っていたこともあったが、洋傘に押され生産量が減少し、ほとんどの業者が廃業となった。

その美馬和傘を復活し、伝承していこうと取り組んでいるのが美馬和傘製作集団だ。現在代表をつとめる住友さんの人生を変えたのは、1枚のチラシ。2011年の暮れ、和傘作りを学ぶ『伝統工芸マイスター講座』開催のお知らせだった。木工や手作りが好きな住友さんは、楽しそうとすぐさま応募し、美馬市にただひとり残る和傘職人三好アヤノさんを講師に和傘作りを学んだ。

そこで学んだメンバー6人が集まって発足したのが美馬和傘製作集団の始まりだ。住友さん自身、最初は「もっと作りたいなぁ」という趣味の気持ちだったが、和傘を作り、向き合っているうちに「この伝統を守りたい。次世代へつなぎたい。産地としての美馬和傘を復活したい」という思いや使命感が日増しに強くなったという。

そのためには、まだまだ課題も多い。竹や和紙などの材料の調達、骨組みなどを作る機械も今は残っていない。販売戦略、和傘作りは行程が長く、1本作るのに半年以上かかる。当然、利益は薄くなる。良質な傘をたくさん作って売る。和傘職人として、安定した収入を得られる仕組みづくりをすることが、美馬和傘の復活へつながる。

幸い、美馬市も竹製品ブランド事業に力を入れていて、平成28年度中には、脇町うだつの町並みに工房ができる予定だ。「目指すは、美馬和傘のブランド化です」穏やかな語り口ながら、そこには強い思いが感じられた。

美馬和傘を作り、郷土の魅力を発信

徳島県立つるぎ高等学校

「彼らは、自分というものを持って和傘作りに取り組んでいますね。素晴らしいですよ」と指導を担当した美馬和傘製作集団の住友さん。それぞれの個性が投影された色とりどりのカラフルな傘が並ぶ美術室。作っているのは、商業科と地域ビジネス科の1、2年生だ。10名が7月11日から8月19日まで16回にわたって和傘作りに取り組んだ。

つるぎ高等学校の大きな特徴が地域と連携し、地域の資源を活かした体験的、実践的教育だ。和傘を実際に作ってみることによって、工法や時代背景を理解し、その魅力を発信することを目的としている。

和傘作りの繊細で複雑な工程をみんな真剣な表情でこなしていく。傘の骨組みを広げて、軒糸と呼ばれる糸を張り、そこにのりを付けた細長い和紙を挟むように巻き貼り付ける軒張りという作業は、手がべとべとして大変だったようだ。そして、「もっと簡単にできると思っていた。びっくりするぐらい難しかった。もっとこの和傘を世界に広めたい」と抱負を語ってくれた生徒もいた。

作った和傘は、学校の文化祭などで展示し、和傘の製作過程を撮影した動画は、徳島県が主催するデジタルコンテンツ公募展に応募する予定だ。

台湾の二林高級工商職業学校と交流も続く同校。いきいきとした若い力で美馬和傘を広く世界へ発信。それも夢ではないような気がしてきた。

真剣な表情

個性を活かしたカラフルな傘が並ぶ。

手がべとべとになって大変だった軒張り。

分からないところは、教えてもらいながら作っていく。

竹を活用した町づくりで子どもたちに笑顔を　NPO法人美馬体験交流の会

竹林に一歩足を踏み入れると、伸びた竹のすき間から光がこぼれる。下草や倒れた竹が取り除かれ、竹チップが敷き詰められた道が心地いい。

中鳥川公園一帯の美馬市水辺の楽校の指定管理業務を中心に、四国三郎の郷の竹林の整備、竹炭や竹チップへの加工、たけのこ狩りや竹灯籠のイベントなど、多くの活動をしているNPO法人美馬体験交流の会。

結成のきっかけは、旧美馬町時代に発足したまちづくり委員会だった。自分たちの住むふるさとを良くしていくのには、どうしたらいいか。町民から提言を聞こうと、委員を公募し、4つの部会が作られた。その中で全国有数の水防竹林を活かしていく取組みも議論された。初代理事長の田中義美さんたちは、委員会にかかわるなかで、行政からなにか言われてから行動するのではなく、自分たちで自発的に行動していこう！と思いはじめ、美馬町が美馬市へ合併後、ほどなくして平成17年6月に美馬体験交流の会が誕生した。

田中さんから理事長を引き継いだ北岡武義さん。18歳の時に就職のため、ふるさとを離れた。退職して美馬市に戻り、活動に参加している。長い間ふるさとを離れていたので、自分が生まれ育った美馬に恩返ししたい気持ちが強いと言う。副理事長の宮田英治さんも「生まれ育った美馬を元気にしていきたい」と話してくれた。

20人のメンバーも年を重ねてきたが、身体の続く限りこの活動は続けていくとの強い信念を持っている。「もうあんまり大きいことはできんけど、コツコツとやっていけたらと思ってるんよ」と言う田中さん。今年春開催された第2回美馬市水辺の楽校春祭りには、800人以上の人が訪れ笑顔の花が咲いた。この笑顔がある限り皆さんの活動は続いていく。

美馬体験交流の会が指定管理をしている水辺の楽校中鳥川公園一帯。

「昔は、竹林は身近な存在だったんでよ」、「和傘や茶道具、おにぎり包むのも竹の皮やったしな」と話す(左から)北岡さん、田中さん、宮田さん。

たくさんの人が訪れた美馬市水辺の楽校春祭りのようす。

大人も子供も楽しめるたけのこ狩りのようす。

これら3枚の写真はNPO法人美馬体験交流の会提供。

歴史を感じながら体験　美馬市観光交流センター

江戸時代から続く美馬市脇町の「うだつの町並み」。吉野川北岸の主要街道が交差する交通の要衝で、脇城の城下町として栄えた。現在のように自動車や鉄道がない時代、人や物資を運ぶために吉野川の舟運が重要な役割を担っていた。吉野川にも面し、阿波藍の集散地として発展した。

昭和６３年に国選定の重要伝統的建造物群保存地区に選定。情緒あふれる町並みに惹かれ、国内外から多くの観光客が訪れている。

このうだつの町並みに今年の１月にオープンしたのが江戸時代後期の蔵を使った「美馬市観光交流センター」だ。観光、歴史、文化の情報を発信する「観光交流室」をはじめ藍染や和傘の製作体験もできる。伝統文化を通じて、市民と訪れる方々との交流を創出する場となっている。

天然藍の染料を使ったハンカチの藍染体験ができる。オリジナルの模様がつけられる。予約優先で一日の体験は８名まで。藍は状態が日々変わるので事前確認や予約が必要。色々と教えていただいた岸友美子さん（写真右）と三木真由美さん。

美馬和傘の製作体験ができる。骨組みをした和傘に和紙をはり、自分だけのオリジナルミニ和傘が完成。ランプシェード（写真左）体験もできる。体験は予約制で２週間前までに予約が必要。

美馬市観光交流センター

徳島県美馬市脇町大字脇町４５－１
TEL：0883-53-3066
FAX：0883-53-3067
営業時間：10：00～17：00
（体験受付は１５時まで）
休館日：第2水曜日

HPのQRコード

うだつ（卯建）

Smile photo よしのがわ

吉野川や流域で出会った方をご紹介します。

吉野川の堤防からもすぐそば。夏の花火大会の時にもよく見えるそう。

美馬市観光交流センター内
茶房「くるわっか」にて
美馬市の地域おこし協力隊として活動している岩田るみさん。東京から美馬市へ。東西に流れる吉野川。川に沈む夕日を初めて見た時の感動は忘れられないそうです。吉野川と夕日の写真もお気に入り。